第２回　リスナー参加型

天下一学問会

高校レベル

問題用紙

倫理

作問者：Unferth

問題数：大問 4 問

記述式

解答時間：60 分

注意事項

1. 解答は専用フォームから行うこと

次ページより問題を掲載

世界史問題

第１問　次の文章を読んで問いに答えなさい。

仏教は怒りを苦しみと捉える。執着の一種であり、(1)人生にある多くの苦しみの一つであるという訳だ。

(2)ストア派は怒りをたしなめるが、滅ぼすことは難しいと考えた。というのも、多くのストア派の哲学者もしばしば怒りに駆られたからだ。とはいえ怒りが悪いものだと考えた点は仏教と似ている。

(3)キリスト教において怒りは難しい問題だった。というのも、旧約聖書の中で「神は怒り……」という文章がしばしば現れたからである。キリスト教において神は良いものであった。そのため、神の怒りもまた良いものとされた。

このように良い怒りは当初神だけの怒りとされたが、じょじょに聖職者や王、貴族と身分の高いものの怒りは正当であるという考えが騎士道物語などで見られるようになっていった。

ローゼンワイン『怒りの人類史』青土社 2021 年の一部要約

問１下線部(1)について、仏教の代表的な苦しみとされる四苦の内容を答えなさい。

問２下線部(2)の哲学者の名前を一人あげなさい。

問３下線部(3)の宗教の開祖とされる人物の名前を答えなさい。

第２問　次の文章を読んで問いに答えなさい。

むかし、韓の昭侯(しょうこう)は、酒に酔って眠った。

典冠(君主の冠を管理する役目)の者は、主君が寒そうなのを見たので、それで衣を主君の体の上に着せ掛けた。

昭侯は眠りから覚めて悦び、近習に尋ねて言った、「衣を着せ掛けてくれた者は誰か」。

近習は答えて言った、「典冠です」。

(4)君主はそれで典衣（君主の衣服を管理する役目)と典冠の両方を処罰した。

昭侯が典衣を処罰したのは、その仕事を遺れて果たさなかったと考えたのである。

昭侯が典冠を処罰したのは、その職域を越えたと考えたのである。

昭侯は寒さを厭わなかったわけではないのである。

(5)職域を越えることをこのまま放置しておけば、いずれ他の官職を侵害することになって、そのことから生ずるところの弊害は、寒いことの弊害よりも甚だしいと考えたのである。

西川靖二『韓非子』KADOKAWA 2005 年より抜粋

問４下線部(4)の文中の昭侯の行動についてあなた自身の考えで評価しなさい。

書き方に迷う場合、以下の書き方を参考にすること。

「……なので、私は昭侯の行動が嫌いです。評価しません」

「……を重視し、私は昭侯の行動を評価します。良いことだと思います」

問５諸子百家の一つであり、法を重んじて信賞必罰を問いた思想の名前を答えなさい。

第３問　次の文章を読んで問いに答えなさい。

言葉の使われ方を描写することで、私はその言葉を理解していることになるのか。

その眼目を理解していることになるのか。何か重要なことで勘違いをしていることはないのだろうか。

〔こう想定してみよう。〕目下のところ私が知っているのはただ、人々がその言葉をどう使用するかということだけである。

実際、それは遊びであるのかもしれないし、(6)儀礼の型であるのかもしれない。

なぜ人々が、言語が生活と噛み合ったかたちで振る舞っているのか、それが私には分からないのである。

意味とは本当に、言葉の使われ方ということに尽きるのだろうか。

言葉の使用が生活と噛み合う、その仕方なのではないだろうか。

というより、そもそも言葉を使うということ自体が、我々の生活の一部なのではないだろうか。

「素晴らしい(herrlich)」という言葉について、人々がこれをどのように、そしてどんなときに使うかを知りさえすれば、私はこの言葉を理解したことになるのか。

それだけでもう、自分でこの言葉を使うことができるのか。

つまり、いわば(7)確信をもって使用することができるのだろうか。

使い方は知っているが、(8)理解せずにそれをなぞっている、ということはありえないだろうか。

(ある意味で、鳥のさえずりを真似るときのように。)理解というものが成立するのは、何か別のことにおいてではないか。

すなわち、「自分の胸の内に」感じること、当該の表現を体験することにおいてではないだろうか。

古田 徹也『言葉の魂の哲学』講談社 2018 年より
ウィトゲンシュタインの説明抜粋

問６下線部(6)について、諸子百家の一つであり、仁と礼を重視する思想の名前を答えなさい。

問７下線部(7)について、「我思う故に我あり」という命題に到達し、『方法序説』を書いた哲学者の名前を答えなさい。

問８下線部(8)について、人間の行動には無意識の欲望(リビドー)があると考え、『精神分析入門』を書いた精神分析学の創始者の名前を答えなさい。

第４問　次の文章を読んで問いに答えなさい。

ヘンリー「単純なことほど面白いものだね。”私は怒っている”と言われたら静はどう思う」
静　「自分に非があるのかと身構えてしまうね」
ヘンリー「でもさっき受けた倫理の授業を思い出してみなよ。哲学でも宗教でも怒りは良くないものだと考えていた。それを自分で言うのが脅しになるのは面白いね」
静　「言われてみれば”怒りは素晴らしい”という考えは聞かないね」
ヘンリー「でも、”私は怒っている”というのは立派な脅し文句なんだ。とても興味深いよ」
静　「しかし本来は怒りなんて自分で対処しなきゃいけない感情じゃないかな。怒るのはなんだか子供っぽい所がある気がする」
ヘンリー「では静はどう怒りに対処しているんだい？」
静　「たとえば６秒怒りを我慢するんだ。アンガーマネジメントというやつさ」
ヘンリー「それで実際、怒りは落ち着ちついたかい」
静　「どうだろう。６秒待てたことがあるかも怪しいな」
ヘンリー「アンガーマネジメントは仏教系のアプローチだそうだね。怒りは執着であるから、消し去ろうという発想な訳だ。しかし怒りが生理現象ならばどうだろう。たとえばトイレに行くのを禁止するのは問題だろう」
静　「生理現象だとは思えないな。少なくとも、トイレに行く頻度で怒ることはないよ」
ヘンリー「となると静は怒りは完璧に制御できないが、生理現象でもないと考える訳だ」
静　「そうなるね」
ヘンリー「あるいはどうだろう。怒ってもいい場所や怒ってもいい時間はあるだろうか」
静　「学校で怒るのはまあ駄目だろうね。でも自室でなら怒っても悪くないかもね」
ヘンリー「他にもある。ゲームに負けて怒る。これは子供っぽいだろうか」

静　　「そう思う」
ヘンリー「では社会の不平等や戦争の悲惨さに怒る、これは子供っぽいだろうか」
静　　「そうは思わないかな」
ヘンリー「これはあとで先生に問い詰める必要があるかもしれないね」

問９以上の文章を念頭に、以下の書式を守りながらあなたの考えを述べなさい。以下から立場を選び、その後、理由を続けて書くこと。

1.怒りは常に悪いことであり、正さなければいけない。自室であろうと、戦争の悲惨さについてであろうと、怒ってはいけない。なぜなら……
2.怒りが悪いかは時と場合による。ある場所では怒っていいし、別の場所では怒ってはいけない。ある問題について怒るのは間違っているが、別の問題では怒って良い。なぜなら……
3.怒りは常に良いことである。怒ってならない時や場所なんてないし、何に怒るかも問題ではない。常に正しい。なぜなら……